

アーバーサリー・ソング



永倉万治



アーバーサリー・ソング

永倉万治

立風書房

永倉万治（ながくら まんじ）
一九四八年生まれ。

現在「オール讀物」「ビッグコミック」月刊
「現代」その他に独特なエッセイやコラム、
小説を連載中。著書には『屋根にのぼれば映
えたくなって』（毎日新聞社）『この頃はめっ
きりラブレター』（講談社）『東京恋愛事情』
（旗摩書房）短編小説集『ジュエーンの朝とキ
ティの夜』（角川書店）などがある。

アニバーサリー・ソング



1989年5月10日 第1刷発行

定価 1,300円

本体 1,262円

アニバーサリー・ソング

著者 永倉万治

発行者 下野 博

編集者 小野 至

発行所 株式会社立風書房

〒一四一

東京都品川区東五反田三の六の一八

電話（〇三）四四七一・一九一

振替東京五―七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

©1989 M. NAGAKURA Printed in Japan
ISBN4-651-66038-X C0093

乱丁本・落丁本はお取替します

アニバーサリー・ソング

装 装
幀 画

安 綿
彦 谷
勝 寬
博

アニバーサリー・ソング
目次

アンドル・エ・ロアール県ブリドレ村	7
愛犬ロズベイ	26
菅野大尉	49
植物の病院	66
ウィリアム・アツカーマンの憂鬱	79
奇跡の生還	99
桂三木助	117

一九会……………	136
山本クンの才能……………	156
PP&Mの頃……………	178
ハイミナーラ……………	197
十七年目の再会……………	212
あとがき……………	254

Blowin' In The Wind

Words and Music by Bob Dylan

© 1962, 1970 WARNER BROS. INC.

All Rights Reserved

Used by permission

Rights for Japan administered

by WARNER BROS. MUSIC (JAPAN) INC., c/o NICHION, INC.

日本音楽著作権協会（出）許諾第8872582-801号

アンドル・エ・ロアール県ブリドレ村

マダム・ギラから、ひと月遅れのクリスマスカードが届いた。

フランスの郵便事情がどうなっているのか知らないが、ツール郵便局の消印がちゃんと押されている。

カードには、彼女の近況が簡単に記され、美しい風景に彩られた数枚の写真が添えられていた。

このギラ夫人にフランス語会話を習っていた時期がある。

二十代の終わり頃のことだから、かれこれ十数年前ということになるか。

その頃僕は、とりたてて何もしていなかった。リトグラフの買い付け商売で得た少しばかりの

貯えを食いつぶしながら、世田谷区松原の板塀に囲まれたお屋敷の中で暮らしていた。立派な門の横にあるくぐり戸を入ると、大きな古い家があり、その横を抜けると奥には広々とした大根畑が広がっている。

畑の一隅に、物置小屋を改造したときか思えない朽ちかけたような二間ばかりの家がある。そこが僕の借家だった。

二十代の多くの時間を、外国での風来坊暮らしに費やしてしまい、いつまでも、腰が落ち着かなかった。日本に戻ってきて、思いついたように旅行業者まがいの仕事についてみたり、ビルの掃除屋、映画の原作やらラジオ番組の構成やらと、旅行先を変えるような感覚で、仕事を見つけてきてはすぐに飽きてしまう。そのうちに体の奥のあたりがモゾモゾし始めて、またそろろ外国に飛び出していってしまう。

結婚してから、そういう行動の回路は少しも変わらない。自分でも、何がしたいのかサッパリわからなかった。

大根畑の見える借家に暮らし始めたのは、そんなヤル気と戦意喪失が交互にやってくる波の谷間のような時期だったのではないかと思う。

日曜日の晴れた日だけ吉祥寺にある紙問屋で小型トラックを借りて、チリ紙交換をやる。それ以外には、何もすることがなかった。

そんな夫をあてにできるかと、妻は自分で仕事を見つけてきて、アルバイトから、いつの間にかある出版社の正社員におさまっていた。稼ぎのない亭主の役回りというのは、なかなか人間が鍛えられる。まして何もしないというのは、尚更だ。ズル休みをして、窓の外にのぞく青空になんとなく気がひけながら、プラモデルを作る少年の気分とでも言おうか。その頃にひとつだけわかったことは、何かを猛烈にするのも何もしないでいるのも使うエネルギーは同じだということだ。

ちびたサンダルをつっかけて、古本屋とパチンコ屋を巡ると、本当に何もすることがなくなる。そこで僕は、家の前に広がる大根畑で、時折農作業を手伝うようになった。その畑は、当時八十歳に近かった大家のジイさんがひとりで耕していた。畝おこしや草むしりの手伝いに熱中していると、世田谷にいますという気がしなかった。

夕暮れが迫ると、大根畑の上空に、どこからともなくコウモリが現われる。暮れかけた空に向かって、僕はゴム草履を放り投げては遊んだ。それが夕べの日課のようなものだった。かつて風来坊旅行を続けていた時に、イスラエルのナザレで、ある修道院に滞在したことがある。そこで夕食は、パンひと切れに大麦入りのスープという質素にして清潔なメニューだった。そのことを思い出した。何かを企てないと心がすぐに萎えてしまいそうな毎日だったから、僕は、労働をしない日の夕食は、スープとパンのみというトラピスト的食生活を気取ってみたりしたが、面

白くもなんともなかった。

静かな生活には違いない。

それでも、陽の高いうちの銭湯で、桶を置くカランという音に打たれると、意味もなく反省した。

「暮らしは低く、想いは高く」

そう呟いては弾みをつけてもみたが、実際のところは無為の魔力に怯えながら暮らしていたのであろう。

そんなある日、何かの本の中で「無為の日々にあったエラスムスは、午前中をことさら実用性のない語学の勉強に打ち込んだ」という意味のフレーズに出会った。

几帳面なニヒリスト。そのセンを練習するのも悪くないな、と思った。

「午前中は語学だ！」

二十代の終わりは、妙に決心ばかりしたくなる年頃でもあった。

ギラ夫人と知り合ったのは、ちょうどそんな頃だった。

永福町の裏手の住宅街をチリ紙交換のトラックで回っている時に、古ぼけた大きな机を運びながら歩いている外人のカップルに出会った。

汗みずくになっている二人の横を、トラックでゆっくりと通り過ぎながら、僕は「大変だね」と声をかけた。二人は、机を路上に置いて、肩をすくめてみせる。女性の方が、僕のトラックの荷台を指差してニコッと笑った。そこには、古新聞が数束ころがっているだけだった。机を荷台に乗せて、二人のアパートまで運んでやることになった。それが彼らと知り合ったキッカケだった。

夫妻は、陽当たりの悪いモルタルアパートでひっそりと暮らしていた。

壁に聖母マリアのレリーフと和風がひとつ掛けられただけの簡素な部屋。家具らしきものもなく、運んでいた机は、散歩の途中で拾ったものと言った。

当時、二人は、三十代前半といった年格好だった。夫のロバートは、アメリカ人で都内の私立高校の英語教師をしていた。

『モンティ・パイソン』に出てくる唇の薄い長身の男にそっくりだったが、それまで僕が会ったことのあるどのアメリカ人よりも陰気で面白味のない男という印象だった。冗談を言うことがほとんどなかった。しかし、見るからに誠実そうな人柄ということはわかる。

ギラ夫人は、フランス人で、ミッション系女子短大の講師をしていた。

美人とは言い難いが、物静かで、おっとりとした女性である。

二人に共通しているのは、日本語が上手なことで、冗談があまり通じないこと。そして敬虔な

カソリック信者であるらしいことだった。

初めて知り合ったその日、僕は、彼らの家の古新聞と古雑誌を整理して、トイレットペーパー数個と交換してあげた。

そしてその翌週の土曜日の朝から、僕は、ギラ夫人の個人的なフランス語の生徒となり、彼女のことを「マダム・ギラ」と呼ぶようになった。

「五月革命」のあった年のパリで、僕は半年近くこれといった目的もなくウツウツと暮らした時期がある。何を考えていたのか、よくわからない。学生証欲しさに語学学校の「アリアンス・フランセーズ」に通ったりもした。もともと他に取り柄はないが言葉はすぐに覚えるタチで、その土地にいと、なんとなくその言葉をカタコト話し始める。

当時は、まだ脳ミソも柔らかかったから、結構フランス語は上達した。しかし、語学は筋肉と変わらない。使用しなければ回路も消えてしまう。

マダム・ギラの元に通うようになって、しばらくすると普通のやりとりはだいぶ思い出し出してきたが、もともと街で覚えた言葉だから、きちんとした文法や語法となるとサッパリだった。「俺はよう」とか「そうじゃん」みたいなアンちゃんフランス語だったのだろう。マダム・ギラは熱心な教師だった。母国語に対する誇りもあるだろう。できないと何度でもやり直しを命じてくる。

授業料をもらった以上は、厳しくやる。普段とは人が変わったように怖い先生になる。その態度は、とても誠実で、心を打つものがあったが、彼女を前にして動詞の変化を何度も暗誦させられていると、自分から望んだこととはいえ、何か不当な目に遭っているような気分になる。

エラスムスへの道は遠かった。

初めの頃は、夫のロバートも、そばにいて、いつも『往生要集』を勉強していた。

たまたま僕が「デキの悪い生徒でして……」などと挨拶がわりに言ったところ、「悪い生徒」という日本語をどう勘違いしたのか、突然不快な顔つきになって「グッドラック」と冷ややかに言い放つと、外に出ていってしまった。

彼女と二人きりで向かい合っているのを快く思っていなかったようだ。

とにかく陰気なアメリカ人だった。

マダム・ギラにしても、二人きりでいて胸がときめくというタイプでもないし、人柄の優しさはわかって、どこか暗い女性だった。もっともフランス人というのは「明るい性格」などというところに何の価値も見出さないようなところがあるから、彼女が珍しいわけではない。

しかし、彼らと付き合うようになってから、ものすごく楽しかったという記憶は、ほとんどない。陽気を取り柄のアメリカ人であるロバートが、内にこもりやすい性格だし、マダム・ギラは、暗い。彼らといっても、あまり弾まない。二人は、それぞれカソリック教団のルートで東京にやっ

てきて知り合い、結婚したらしい。

六本木や青山に遊びに行くこともなく、井の頭線沿いの住宅街の片隅で、物価の高さに怯えながら、何を期して日々を送っていたのか。

日本人に母国語を教え広めようという目的でやってきたとも思えないし、職業的な伝道師でもなかった。年齢的にみればフラワートイルドレンや五月革命の世代に属する二人だったが、カウンターカルチャーの名残も気配も感じられない。

考えてみれば、時代の泡のような風俗や文化の潮流と無縁にやり過す人間の方が圧倒的に多いわけだし、その頃は、「普通」とか「平凡」ということに関心が向いていたから、冗談のわからない、ひっそりと暮らす生真面目なこの外国人夫婦に僕は次第に興味を覚え始めた。

僕のフランス語は、あるところから先へは一向に上達しなかった。

それでも休むことなく半年近く、彼女の元に通い続けた。

相変わらず、彼女とのやりとりはあまり面白くない。時折彼女はふさぎ込んでいることがあるし、そんな時は、会話もますます弾まない。

あれは、秋晴れの日が何日か続いたとても気持ちのいい土曜日だった。

僕は、気まぐれに、十五夜用の花というのを買っていった。ススキに、萩、オミナエシといっ